追悼・稲垣喜代志さん

熱く厳しい「心」よ 伝われ

追悼・稲垣喜代志さん

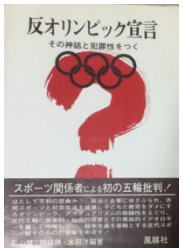
劉永昇

写真は中日新聞 10 月 19 日夕刊。名古屋の風媒社編集長、劉永昇さんによる「追悼・稲垣喜代志さん」である。稲垣さんの遺稿集『その時より、野とともにあり』の刊行作業を進めているという。「追悼」後半を紹介したい。

じつはこの本は、もともと風媒社の創業 50 周年に向けて企画されたものだった。結局それはかなわなかったが、社としてもいつか出そうと思っていた。晴れがましいことを嫌う稲垣さんも時機を待っていたようで、今回遺品の中から原稿を捜し出すと、あちこちに新たな添削が施されていた。遺稿集から、稲垣さんらしい言葉をいくつか取り出してみよう。「いま日本は〝巨悪〟が大手をふってまかり通る悪人天国になってしまった」「どこの国の、そして誰の人権も同じ重さなのである」「人間だけは使い捨てにはできぬ」「ものわかりのよさこそ最大の敵である」「人生には道楽や無駄が必要である。文化はその中から生まれる」‥。20 年以上前の文章だが、今もそのまま通用することばかり。それは書き手の目が人間の〝業〟を射抜き、その原罪を衝いているからだろう。ともすれば人は己のために他人を踏みつけ、差別し、殺し、それを忘れ、恥じるところがない。それは 70 年前も今も変わらない。戦時にはアジア隣国を蹂躙し、平和な時代には女性、障害者、マイノリティーを差別する―これは同じ心の所業だと。

そうした問題意識から、いち早く従軍慰安婦証言集や原発をめぐる書籍が出された。また、つねに地域に根ざし、徹底して弱者の側に立つことを出版姿勢とした。そこから長良川河口堰や岐阜県御嵩町の産廃処分場問題のルポが生まれた。「心から心へ」とは稲垣さんの好きだった言葉で、社名の由来でもあるのだが、その「心」はかくも熱く、厳しいものなのである。

今から 30 数年前、稲垣さんが名古屋市立女子短大の研究室に来られたことがある。短大に就職して間もない頃だ。写真の影山健・岡崎勝・水田洋編著『反オリンピック宣言』の原稿依頼だった。「オリンピックをめぐる名古屋市の財政・都市問題」を 24 ページ執筆した。忘れられない本である。



その後はお会いする機会がなかったが、拙著『災後の新聞』の編集打ち合わせのとき、写真のような感じの稲垣さんに風媒社でお会いした。地域に根ざす出版人の風格のようなものを感じた。稲垣さん、ありがとうございました。

（2018 年 10 月 29 日）